

# 令和元年産水稻の生育状況と今後の対策 (水稻生育診断技術確立調査－9号)

農林総合研究センター  
令和元年7月29日調査

## 気象経過

<平年対比>

北陸地方は7月24日頃に梅雨明けしたとみられる。

### 【平均気温】

- ・7月第4半旬は、金沢、輪島ともに並（平年差：金沢-0.1℃、輪島-0.1℃）
- ・7月第5半旬は、金沢、輪島ともにかなり高い（平年差：金沢+1.9℃、輪島+2.1℃）

### 【日照時間】

- ・7月第4半旬は、金沢は少なく、輪島はかなり少ない（平年比：金沢57%、輪島47%）
- ・7月第5半旬は、金沢、輪島ともに並（平年比：金沢102%、輪島84%）

### 【降水量】

- ・7月第4半旬は、金沢は並、輪島は少ない（平年比：金沢75%、輪島5%）
- ・7月第5半旬は、金沢は並、輪島はかなり少ない（平年比：金沢79%、輪島21%）

### 【1ヶ月予報】

7月25日発表の1ヶ月予報（7月27日～8月26日）では、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、少ない確率50%です。日照時間は、多い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、高い確率50%です。

## 生育概況等

### 【本田の生育】

#### 1. 出穂期

- ・コシヒカリの出穂期は、加賀地域では7月25日～30日と、平年に比べ2～4日早い見込み、能登地域では7月29日～8月3日と、平年に比べ4日早い見込み。
- ・ひやくまん穀の出穂期は、加賀地域で8月2日～10日と近年に比べ1～4日遅い見込み、能登地域では8月4日～7日と、近年に比べ3～5日早い見込み。

コシヒカリ 加賀： 7月25日 ～ 7月30日 平年より2～4日早い

能登： 7月29日 ～ 8月3日 平年より4日早い

ひやくまん穀 加賀： 8月2日 ～ 8月10日 近年より1～4日遅い

能登： 8月4日 ～ 8月7日 近年より3～5日早い

#### 2. 草丈

コシヒカリの草丈は平年比102%（加賀地域101%、能登地域104%）と並。

ひやくまん穀の草丈は近年比98%（加賀地域100%、能登地域95%）と並。

#### 3. m<sup>2</sup>あたり茎数

コシヒカリは、408本/m<sup>2</sup>、平年比105%（加賀地域105%、能登地域112%）と並になっており、既に出穂期を迎えている圃場が多いことから、穂数は平年並に確保される見込みである。

ひやくまん穀は、390本/m<sup>2</sup>、近年比109%（加賀地域112%、能登地域107%）と並になっており、目標穂数（360本/m<sup>2</sup>）は確保される見込みである。

### m<sup>2</sup>当たり茎数（平年、前年）及び株当たり茎数

コシヒカリ	県平均	408本	（平年比 105%	前年比 107%）	22.7	本/株
	加賀	410本	（平年比 105%	前年比 108%）	22.5	本/株
	能登	406本	（平年比 103%	前年比 105%）	23.0	本/株
ひやくまん穀	県平均	390本	（平年比 109%	前年比 108%）	19.9	本/株
	加賀	374本	（平年比 112%	前年比 112%）	19.5	本/株
	能登	406本	（平年比 107%	前年比 104%）	20.3	本/株

## 【病害虫の発生状況】

1. 7月下旬の本田侵入調査では、斑点米カメムシ類の密度が平年より多くなっている。種類別には、歩行性のシラホシカメムシ類や飛翔性のアカスジカメムシ・アカヒゲカスミカメなどは平年と変わらないが、クモヘリカメムシが平年の約7倍と特に多くなっている。
2. 葉いもちが県内各所で発生しており、拡大している。一部でずり込みも見られる。
3. 紋枯病の発生が散見されている。
4. ニカメイチュウ、イナゴの被害が散見されている。

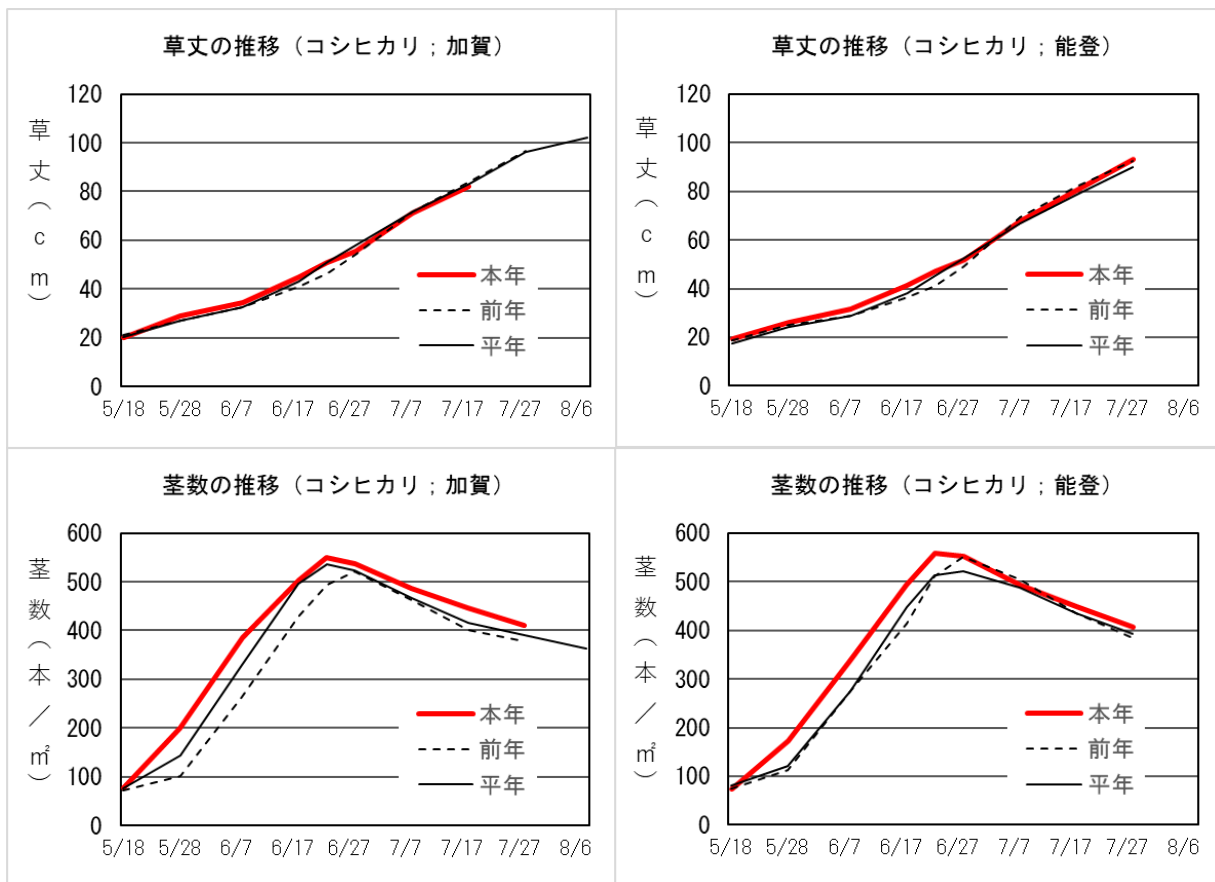
## 当面の対策

1. 出穂後は登熟向上を図るため、間断通水（3～4日おきに通水）による飽水管理を刈り取り3日前まで行う。
  - (1) **特に、登熟初中期（出穂後7～21日頃）に平均気温27℃以上の高温と水分不足が重なると、白未熟粒・胴割粒の発生を助長する。**
  - (2) **早期に下葉が枯れ上がると株支持力が低下し倒伏を助長**する。
  - (3) 高温時の長期湛水は、根の機能低下を助長するので行わない。
  - (4) なお、強風やフェーンが予想される場合は、あらかじめ入水し、稲体の活力低下を防止する。
  - (5) 用水をため池に依存していて少雨が続けている地域等では計画的な水利用に努める。
2. 斑点米カメムシ類の本田への侵入が確認されており、高温・乾燥が続くと侵入頭数がさらに多くなると予想される。斑点米の発生を防止するため出穂後2回の防除を徹底する。
  - (1) **早生や7月中に出穂するコシヒカリ**では、**出穂7～10日後と14～17日後の2回防除を徹底**する。
  - (2) **8月中に出穂するコシヒカリ、ひやくまん穀等**も、**出穂7～10日後と14～17日後の2回防除を徹底**する。
    - 出穂後1回の防除のみを計画している地域では出穂後2回目の防除を行う。
    - 特に**クモヘリカメムシの多い中山間地**では**コシヒカリ、ひやくまん穀の追加防除を必ず実施**する。
  - (3) 今後の畦畔等の除草については、カメムシ類の本田侵入を助長するので原則行わない。但し、やむを得ず除草を行う場合は本田防除の直前に行うこと。
3. 葉いもちの拡大を防止するため、すでに発生している地域では圃場をよく見回り、新たに発生が認められた場合は直ちに防除を実施する。特に直播、晩植コシヒカリ、晩生品種については注意する。

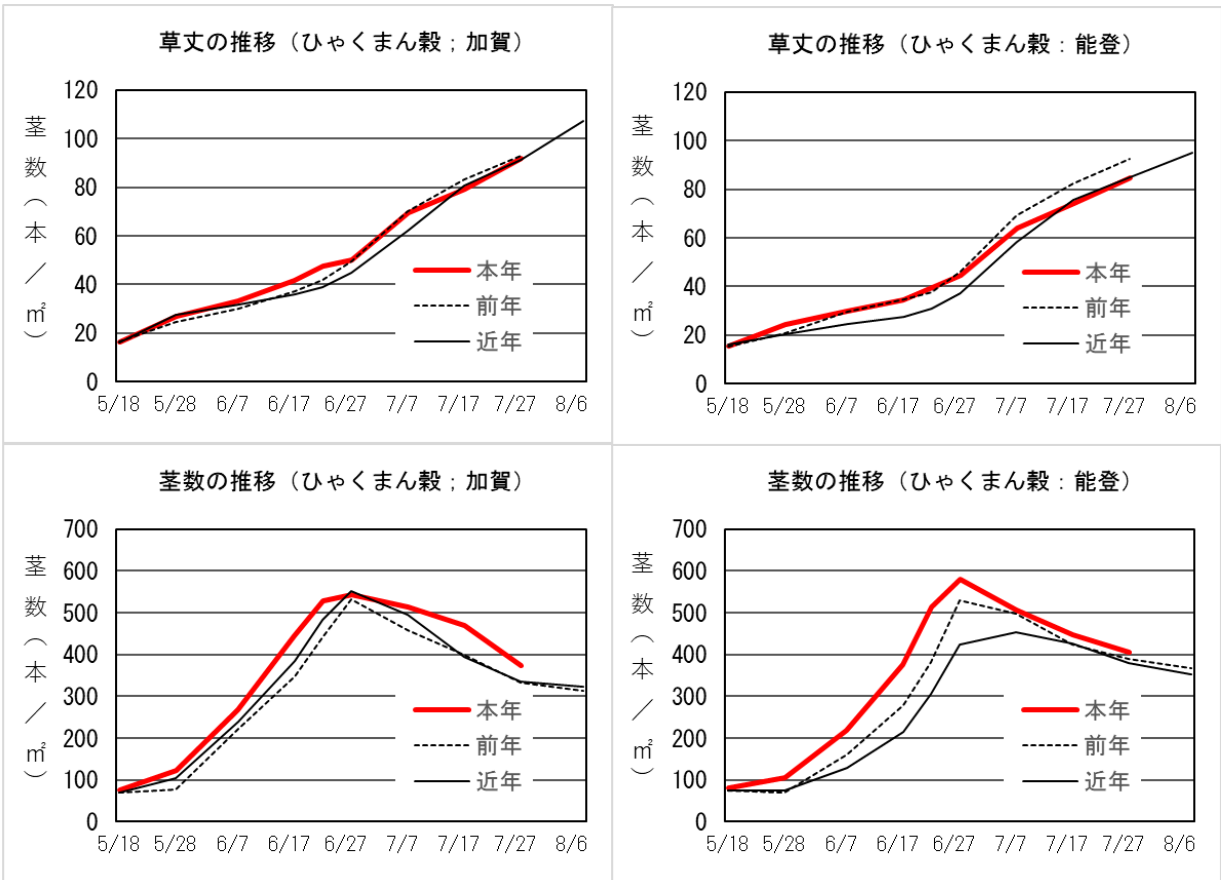
すでに葉いもちの発生がみられることから**穂いもちへの移行が懸念されるため、出穂前後の基幹防除を徹底**する。
4. 登熟期が高温に経過する年は、胴割粒の発生が懸念されるため、刈取適期を順守する。
  - (1) 高温年では**胴割粒の発生を軽減するため、籾黄化率80%から収穫を開始し、85%までに終了させる。**
  - (2) 高温年の登熟積算気温は、早生品種が**900～950℃**、中生品種が**980～1,030℃**、ひやくまん穀が**1,100～1,150℃**となる。
  - (3) 特に五百万石、石川門等の酒造好適米は高度精白されることから、軽微な胴割れでも精米過程で碎けてしまうことに留意し、適期刈取を厳守する。
  - (4) 共乾施設においては中生・晩生品種の胴割粒の発生を防ぎ、刈遅れにならない運用計画を作成する。

<参考：コシヒカリ、ひやくまん穀の地域別草丈および茎数の推移>

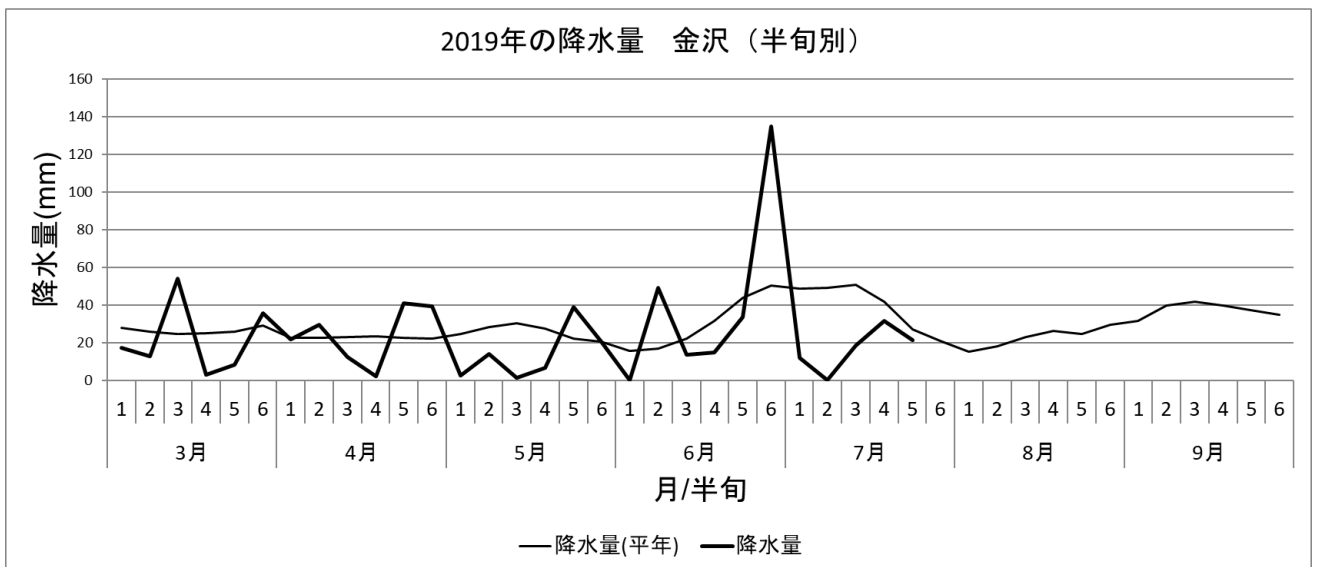
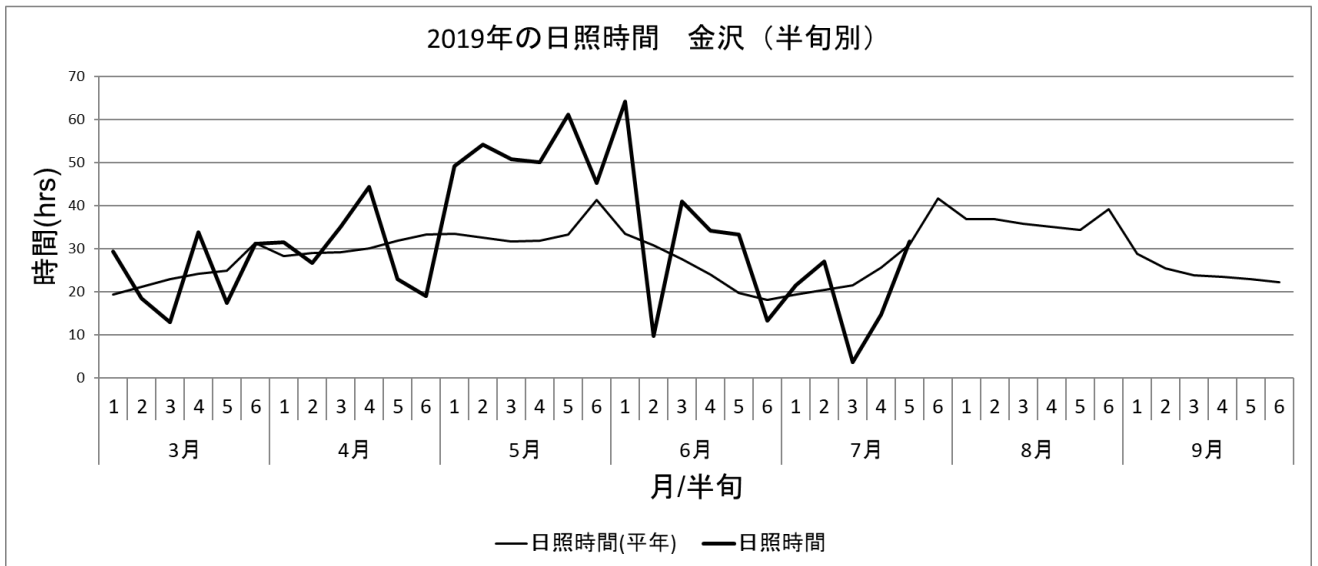
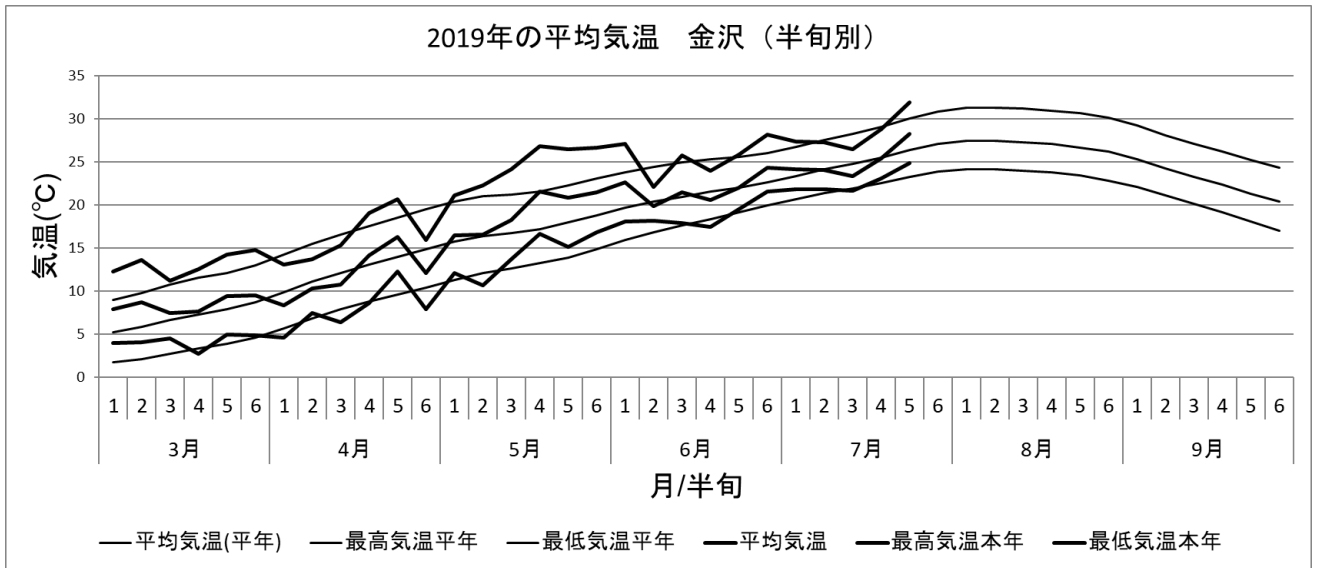
- ・コシヒカリの草丈は加賀地域、能登地域とも平年及び前年並となっている。
- ・コシヒカリの茎数は加賀地域で平年及び前年と比べてやや多く、能登地域では平年及び前年並であり、穂数は平年および前年並に確保される見込である。



- ・ひやくまん穀の草丈は加賀地域、能登地域のいずれも近年並となっている。
- ・ひやくまん穀の茎数は加賀地域で近年及び前年に比べやや多く、能登地域で近年及び前年並となっている。6月中旬までに茎数360本/m<sup>2</sup>を確保できており、目標穂数（360本/m<sup>2</sup>）を確保できる見込みである。



# 気象経過イメージ（金沢気象台）



# 気象経過イメージ（金沢気象台）

